12　大正期の衛生博覧会を巡る人間観・身体観について

竹原　直道
宗像市

演者は明治から昭和初期にかけて開催された衛生博覧会，あるいは衛生展覧会と称する衛生思想の啓蒙イベントに興味を持ち，様々な角度から考察を試みてきた．昨年は第43回日本歯科医史学会において，東京大正博覧会（1914）で開設された「通俗衛生博覧会」および「美人島旅行館」を中心に発表した（安細敏弘／竹原直道：展示される身体．日本歯医史会誌 31: 102–103, 2015）．東京大正博覧会は，参観者が700万人を超えたこともあり，衛生や人間に関係するパビリオンがいくつも開設された．それらの企画に統一性がある訳ではないが，大きく分けると三つに分類できる．

一つは当時欧米の先行博覧会に倣った植民地主義的人間展示の企画である．その導入は，東京帝大の坪井正五郎教授が第五回内国勧業博覧会（1903）に東アジア各国人の展示を企画したのが嚆矢である．それは大正に入り，「明治記念拓殖博覧会」（1912）に引き継がれ，「帝国版図内の諸人種」が展示された．その会場写真を見ると，「台湾生蛮人住宅」と書かれた立札のついた住宅の前に佇む，台湾先住民やアイヌの人々が写っている．住宅の周りには観客用の手すりがついた柵が設けられていた．今日の視点からは，柵に違和感を覚える．しかし，この柵は明治期，東京の観光名所の一つであり，婦人・子どもも訪れた吉原遊郭の張見世の柵と同じものである．当時の観客に，違和感はなかっただろう．この人間展示の企画は東京大正博覧会にも引き継がれ，「南洋館」や「拓殖館」で，より大規模な展示が行われた．この博覧会における人間展示企画は，今日マスメディアで取り上げられ裁判となったことでも分かるように，問題点が多いことは明白であるが，人間展示だけを切り離して論ずべきものでもない．

二つ目は芸能・音曲を見せるもので，東京大正博覧会には「演芸館」，「美人島旅行館」のパビリオンが開設された．演芸館は大正期を通じて開かれた衛生博覧会の余興には，大抵併設されている．

三つ目が医学界も関わった身体展示を中心とした衛生博覧会である．東京大正博覧会の衛生展示は2つあった．一つは「衛生経済館」であり，こちらは結核予防会，私立衛生会や赤十字社が出展している．もう一つは二六新報社が建てた，「通俗衛生博覧会」である．この「通俗衛生博覧会」の展示物は「血液循環状態」を示す透明な「機械」や，「陰嚢象皮病ニ依ル大睾丸」，「巨大脂肪腫」など．二六新報社の中村瞬二の回想録『呑牛撲稿』（1961）によると，この他に保存液につけた生首10級，刑死した高橋伝の性器や刺青を入れた皮膚なども展示されたという．大きな博覧会の場合，複数の衛生パビリオンが作られたのも興味深い．例えば，福岡の東亜勧業博覧会（1927）には，「教育館」と「衛生館」があったが，大学や歯科医専の展示は「教育館」で行われている．「衛生館」の内容は不明だが，あるいは「通俗衛生博覧会」に類似のものだったかも知れない．東京大正博覧会の展示物はその後更に充実し，「大阪衛生博覧会」（1915），「戦捷記念全国衛生博覧会」（1919），「児童衛生博覧会」（1920），「大正衛生博覧会」（1921），「平和記念東京博覧会」（1922），「名古屋衛生博覧会」（1926）などへと引き継がれた．なお東京大正博覧会には，この他に「木乃伊座禅館」，青山会場「大賞閣」では生人形の展示もあった．東京大正博覧会の衛生展示は，生身の人間から疾病・臓器・死体・ミイラにいたるまで，なんでもありの企画であった．これらの企画が示した人間観・身体観を批判的に掘り下げるには，その時代背景を明確にすることが必要である．

今回の発表においては，東京大正博覧会を出発点としながら，その後の衛生博覧会が展開した人間観・身体観を明らかにする．